

佳作

『キーワードは「おかえし」』

佐々木 幹雄さん

昨年のゴールデン・ウィーク、「ラブ」と名付けていた15歳のラブラドル・レトリバーが突然歩けなくなった。老犬だから若い頃ほどではないとはいえ、前日までは元気に走り回っていたのに……。

獣医に診てもらおうと、高齢と腎機能の急激な低下で「あと数日の命」と宣告された。めったに帰って来ない地方の大学に通う二女も帰省し、家族全員が見守る中、2日後に大切な“家族”は亡くなった。

久しぶりで一家四人が同じテーブルに座り、愛犬の思い出話をしていると、次女が私をにらんで言った。

「フィラリアの薬をもらった時に、ちゃんと検診も受けてれば、腎臓のことは見つかったはずなのに……」

前の月、私が犬を動物病院に連れて行った。いつもなら検診を受けて薬をもらうのだが、病院が混んでいて犬同士が吠え合い、さらに私も時間がなかった。それでフィラリアの薬だけもらって帰って来てしまったことを責めているのだ。確かに検診を受けていれば、愛犬との別れはもっと先になったかもしれない。

長女が助け舟を出してくれた。

「そう言えば、パパにも検診の案内来てたでしょ。ちゃんと行かないとダメだよ」

私は20年以上経営してきたジュエリーの店を、事情があって7月末で閉店することにしていた。その処理に追われ、住んでいる自治体から定期検診の案

内が来ていたが、とても検診に行っている時間はなかった。

家族3人に念押しされ、地元の医院で定期検診を受けた。顔馴染みの医師が心電図の結果を見ながら「最近、調子の悪いところはないですか？」と尋ねるので、

「階段を登るのがかなりきついのと、荷物がとてつもなく重く感じます」と答えた。

「ちょっと気になりますので、念のためですが、大学病院で検査してみましよう」

それで、大学病院の循環器内科の紹介を受け、心臓に関するあらゆる検査をした。6月下旬に結果が出て、主治医となった大学の先生から「狭心症の疑いがあるので、3日程入院してカテーテル検査をします。もしものことがあったら大変ですから」と言い渡された。

急いで仕事を調整し、7月初旬に入院したが、ここで事態は急展開する。

「心臓には3本の太い動脈がつながっていますが、うち1本はほぼ完全に塞がっていて、残りの2本も90%塞がっています。狭心症というより、心筋梗塞の状態です。即刻、再入院してステントを入れます。場合によっては開胸してバイパス手術になります」

その時、私は仕事のスケジュールのことしか考えていなかった。

「先生、今月は生涯で一番忙しい時期なので、何とか来月にしていただけませんか？」

柔和に見えた医師の表情が、一変した。

「命より大事な仕事など、ありません！」

経営する店のスタッフ達に相談すると、「身体が一番に決まっています」と、私がやるはずだった閉店にまつわる様々な業務を代行してくれた。

こうして再入院し、ステントを4本入れることで開胸手術はせずに済んだ。

後に主治医は「血管の詰りに気づかず超多忙な夏を過ごしていれば、7割方死亡していたでしょう」と語っていたが、本当に危ないところだった！

退院した翌日、百貨店内にある店に顔を出すと、お客様や取引先が引きも切らずにやって来た。百貨店の方が心配して警備室脇に私専用のベッド付休憩所を設置してくれたが、そこに行っている暇などなかった。座ることさえままならないほど、閉店までの日々、花と土産を持った来客が続いた。ご年配のお客様には、店がなくなってしまう淋しさと、私の手術が無事に済んだ嬉しさがなймаぜになり、私の手を握りしめて泣く方もいたほどだった。

こうして、人生で一番密度の濃い、怒涛の7月が終わった。

愛犬が亡くなったことで家族に「検診」を勧められ、それが私のこれまでの病歴を知っているかかりつけ医による大学病院の紹介につながり、そして、大学病院の担当医が“仕事優先”の私を一喝して手術をして下さった。このリレーのどのランナーが欠けても、私は生きていることはできなかつたかもしれない。さらに、店のスタッフとお客様たちが、人は単に生き続けるだけではなく、人との関わりの中で生きているからこそ意味があるということを教えてくれた。ずっと商品としてのジュエリーを扱って来たが、私は人こそ「宝石」であることに気がついていなかった。

さて、命拾いをした私のこれからの人生、キーワードは「おかえし」だ。